

女性医師支援のあゆみ

History of
female doctor support

第4章

北海道医師会 女性医師等
支援相談窓口事業のあゆみ



1 相談窓口コーディネーター

(1) コーディネーターの委嘱

2011年6月15日に開設した相談窓口事業の一環として、復職・育児・介護など医師が抱えるさまざまな不安や悩みに対応するため、札幌・函館・小樽・旭川・釧路地区にコーディネーター9名を配置することとした。

さらにきめ細やかな対応ができる体制にすることとし、コーディネーターを2015年度からは3名、2017年度からは5名増員している。

(2) コーディネーター連絡会

相談窓口事業を円滑に行うため毎年開催している。

(3) 相談窓口利用者との懇談会

相談窓口を利用した女性医師等との意見交換を通じて、利用者相互の交流、情報交換ならびに要望の取りまとめを行い、今後の支援方法に反映させることを目的に2013年度から毎年開催している。



相談窓口利用者との懇談会
(上:2013年10月26日/下:2018年7月8日)

■ 歴代コーディネーター紹介

2011年度就任(創設時)

[北海道医師会]



畑 俊一
医療法人社団 畑俊一内科
任期:2011~2012



藤井 美穂
社会医療法人社団カレスサポート
時計台記念病院
任期:2011~現職



北野 明宣
医療法人社団豊明会 木下病院
任期:2011~現職



岡部 寛裕
医療法人社団静和会 静和記念病院
任期:2011~2012

[各地区]



星井 桜子
ほしい小児科・整形外科
任期:2011~2017



濱松 千秋
医療法人社団千風会
ちあき内科・呼吸器科クリニック
任期:2011~2017



新谷 朋子
医療法人花音 とも耳鼻科クリニック
任期:2011~現職



永石 歓和
札幌医科大学医学部 解剖学第二講座
任期:2011~現職



小葉松 洋子
湯の川女性クリニック
任期:2011~現職



澤田 香織
本間内科医院
任期:2011～現職



安藤 敬子
市立旭川病院
任期:2011～2018



坂田 葉子
医療法人社団
丘のうえこどもクリニック
任期:2011～2017



足立 柳理
医療法人社団功仁会
足立皮膚科美容外科クリニック
任期:2011～現職

2013年度就任

[北海道医師会]



深澤 雅則
医療法人社団深仁会 ふかざわ病院
任期:2013～現職



伊藤 利道
医療法人社団 美園いとう内科
任期:2013～2018

2015年度就任

[各地区]



柏木 理絵
医療法人 啓生会病院
任期:2015～現職



藤根 美穂
岩見沢市立総合病院 小児科
任期:2015～現職



西田 幸代
札幌医科大学医学部 泌尿器科学講座
任期:2015～現職

2017年度就任

[各地区]



毛糠 優子
ゆのかわ温泉整形外科
任期:2017～現職



長谷部 千登美
旭川赤十字病院
任期:2017～現職



木内 真理子
医療法人社団美生会 釧路第一病院
任期:2017～2018



清水 薫子
北海道大学病院 内科 I
任期:2017～現職



山本 明美
旭川医科大学医学部 皮膚科
任期:2017～現職

女性医師支援の黎明期

北海道医師会
女性医師等支援相談窓口
元コーディネーター
旭川市医師会
安藤 敬子 先生



私が医師会とかかわりをもったのは、1997年に院長命令で旭川市医師会の理事になった時からです。それまでは日々の診療と生活で精一杯、医師会は私とは無関係の存在でした。何も分からないまま、日本医師会の女性会員懇談会にも出席することになり、やっと女性医師が仕事を続ける上での問題点などに気付きました。

この懇談会ではテーマは決められておらず、全国から集まった女性医師9人による自由討論でしたが、これは、まだ女性医師問題の方向性が見えない混沌とした時期だったからだと思います。それでも2年間の討論の結果として「女性会員フォーラム」が開催され、育児休暇、保育所問題、産休後の復職支援、時短勤務、ワークシェアリングなどの意義が次第にハッキリしてきたと思います。

この頃、病院などの管理者、女性医師を対象として、北海道医師会で女性医師実態調査をしました。設問に工夫が足りなかったため、管理者の回答では建前と本音に乖離を感じました。しかし当時から、産休期間の代替え医の斡旋を医師会に期待する声が多数ありました。

また、北海道医師会の代議員会にオブザーバーとして出席した時は、会場に事務職以外の女性がいなことに驚き、そして男性だけで女性医師問題を考えても片手落ちになる、男女が一緒に考える場として旭川市医師会の中に女性医師部会を創ろう、という気持ちになりました。ただし、女性医師部会を創設できたのは会長のトップダウンの力が大きかったです。

藤井美穂先生が北海道医師会常任理事に就任してからは、女性医師支援は大きく進歩しました。まだ男女共同参画の目標値には程遠いのが現実ですが、医学生や研修医など若い世代の意識改革が進めば、将来は社会全体も変わっていくと期待します。

相談窓口コーディネーターを務めて

北海道医師会
女性医師等支援相談窓口
コーディネーター
岩見沢市立総合病院・
小児科
藤根 美穂 先生



相談窓口コーディネーターとして、これまでに数人の医師の復職相談を担当させていただきました。その中から印象に残った事例についてご紹介したいと思います。

まずは私の勤務している病院で短期間の外来業務をしてくださった女性医師についてです。ご家族でニュージーランドに移住されており、普段はお仕事をなさっていませんが、ビザ更新で帰国していらっしゃる間にお仕事をしたいとのご相談でした。小さなお子さんをお連れで、時間のゆとりをもって仕事をしたい、けれども小児科医として学んだことを生かしたい、とのご希望がありました。私も同じ小児科医でしたので、上司に相談したところ院長と掛け合ってください、当院のスタッフが夏休みをとる時期に合わせて約1カ月の間活躍していただくことができました。仕事ぶりも素晴らしいので当院スタッフの評判も良く、来ていただいてよかったと思います。

もうお一人は留学生として日本で医師免許を取得されていましたが、その後病気を発症されて思うような働き方ができないというご相談でした。夢や思いをお聞きしつつ、体調に合わせて無理のない仕事から始めることをお勧めし、現在は体調に見合ったお仕事ができているようです。

ブランクがあったり病を得たりすると、働き続けることの敷居がとて高くなるという経験が自分にもありました。なるべくブランクは短い方が良いですが、真摯に学び直すための熱量と、身の丈とは言えないことをあきらめて切り替える潔さがあれば、思ったより広い医学のどこかの分野で働く余地がきっとあるはずです。「働きたい」と「働いてほしい」がうまくつながるよう、相談業務を続けたいと思います。

女性医師等支援相談窓口を利用して

社会医療法人
北海道循環器病院
山口 紅 先生
(2013年復職研修受講)



私は妊娠、出産に伴い家庭に入り、約10年間子育てに専念することになりました。しかしいろいろなことが起こり、まだ幼い子どもたちを連れ札幌に転居することになりました。その状況下で就職することには大変な戸惑いを覚えました。

そこで相談させて頂いたのが、女性医師等支援相談窓口でした。窓口では就職のほか、札幌市の子育てサポート事業への登録等の生活面のサポートの相談にも乗ってくださり大変助かりました。「これらのサポートで不可能だったら家政婦も一つの案」とアドバイスも頂き、一日数時間だけ家政婦の力を借りることにしました。家政婦には一部の家事も依頼でき、自分の時間を作れるという意味でも有意義でした。

一方で就職に関しては複数の施設を見学に行き、当時子育て中の女性医師が勤務していた現在の所属先に就職することに致しました。当直や呼び出し免除など業務の制限や、勤務時間短縮などの配慮を頂きました。何より周囲の理解に感謝致しております。女性医師等支援事業で精力的に活動されている先生方には及びませんが、自分もできる範囲で頑張ろうと思いました。

社会人としての再出発は思いのほか辛いものでした。それまで循環器内科医として勉強しておりましたが、自分のスタイルを見つけるにあたりオリジナリティーを持つため、放射線科の研修に行くお許しを勤務先から頂きました。健診等の仕事は続けながらの研修でしたので、時間的にも体力的にも大変になり、挫けそうになったこともありました。放射線科専門認定医を取得するに至りました。

私のように一人では何もできない者がここまで来られたのは、窓口やさまざまな方の根気強い手篤いサポートのお陰であり、感謝を言葉に尽くせません。少しでも成長させていくことで感謝を伝えていきたいと思えます。

女性医師等支援相談窓口を利用して

橋本 純子 先生
(2015年相談窓口利用)



2015年3月、同業の夫の転職に伴い当時2歳の長男を連れて家族で札幌へ転入してまいりました。北海道に住むのは初めてで、仕事をしたいと思ってはいたものの具体的なあてはありませんでした。

まずは仕事ができる環境を整えようと、保育園と家事代行サービスを探しました。とある家事代行の会社にサービスの申し込みをしたときに医師で職探し中だと言うと、担当の方から「仕事探しであれば女性医師等支援相談窓口にご相談したらよい」とアドバイスいただきました。さっそくコンタクトをとり、就職の相談から北海道生活に関してまで多くのアドバイスをいただきました。途中転入者が保育園や学童の空きを見つけることはそう簡単ではありませんし、勤務時間に制限がある場合の職探しは不安なものです。この点をサポートしてくださった女性医師等支援相談窓口には大変感謝しております。

幸い希望どおりの条件で就職先が決まり、素晴らしい同僚と上司に恵まれ楽しく仕事をさせていただくことができました。また自分の専門を生かして他の病院でお手伝いをする機会や、遠隔読影／女性医師のリモートワークに関する自身の経験を日本性差医学・医療学会学術集会で発表する機会もいただきました。

その後は夫の転職、留学に伴いカリフォルニア等で過ごしておりましたが、2020年1月に帰国して今は大阪にいます。いろいろな土地で暮らす人生はそれなりに楽しいものですが、自身のキャリア継続にはつらい環境です。現在も新たな土地で子どもの預け先を探し中です。今の土地は保育園激戦区のため先行きは明るくないですが、可能な範囲で働くことから始めて少しずつキャリアを広げていければと考えています。

相談窓口利用者の体験談

長い道程の先に

札幌マタニティ・ウイメンズホスピタル 小児科
小熊 彥子 先生



私は1945年、広島・長崎に原爆が投下される半年ほど前に道内で生まれ育ちました。

私が学生の頃、インターン制度反対、医局制度反対などが声高に叫ばれておりましたが、みな真面目に良い医師になることを考えていたように思います。

私たちは卒業した年の春に国家試験を受け、医師免許を取得しましたが、非入局・臨床系大学院ポイコットを掲げておりましたので、多くの者は青医連として大学病院で研修させてもらう道を選びました。全員が交代で3カ月間市中病院で研修医として給与をいただき、それをプールし、そこから全員が1カ月分ずつ1年間生活費を受け取りました。残りの9カ月間は3カ月ごとに希望の科をまわらせてもらうというものでした。私は一内、三井芦別炭鉱病院の内科で研修したのち、大学に戻り小児科、第一病理で研修させていただきました。

翌年春、私は首都圏の病院の小児科レジデントなる名称の研修医となり3年間を過ごしました。その後、興味を持っていた分野を学びたいと思い、やはり首都圏にある他の病院に移りましたが、4年弱で退職、北海道に戻り結婚しました。

結婚後は、次々と出産また姑女が認知症になったこともあり、家事・育児・雑用などであっという間に年月が過ぎてしまいました。

当初、医療現場を離れたのは、自分の子どもを見ずに小児科医を名乗ることにひっかかりを感じたというのもありましたが、医療の場を離れたのだから医師とは言えないという思いにもなりました。

50代に入った頃、現役で仕事を続けていた友人に、どこか病院で研修させてもらえたらと思っているのだがと尋ねたところ、それは現場の者にとっては迷惑と言われ、妙に納得してしまいました。

世の中はIT時代と言われるようになり、取り残された感を強くするようになりました。60歳頃、老人向けのパソコン教室に通いました。検索し、必要

なことをダウンロードし印刷する。今もできるのはそれくらいです。

医学を勉強し直してみたいと思い、自宅にあった分厚い生理学の本を読み始めましたが、なかなか読み進めることができず挫折してしまいました。ならば、小児科学からと思いましたが、家にいるとつい家事を優先してしまい思うように進みません。

60代半ばにさしかかり、大学の小児科の講義を聴かせてもらえたらと思い、思いきって小児科医として仕事をしている同期生に電話をしたところ、小児科の医会長（かつての医局長ポスト）にお会いできることになりました。秋に小児科の集中講義があるとのことで、それまでは教授回診を見せただけのことになりました。秋、大学の講堂で学生さんたちと一緒に各々の分野の先生方からの講義を聴かせていただきましたが、医学医療の進歩に目を見張る思いでした。と同時に、しっかり勉強し直さなければ、とても医療現場に戻ることはできないとの思いを強くしました。その後も2年程時折り外来も見せていただいたりしながら過ごしました。私は卒後道外に出てしまい、出身大学の小児科とは無縁に過ごしておりましたのに、ただ卒業生というだけで勉強する機会を与えてくださった教授はじめ教室の先生方、いろいろ便宜をはかってくださった事務の方々本当に感謝しております。

また、現場で実際の医療を学び、その延長線上に私が医師として何かできることがあればと思い、インターネットで「女医復帰」を検索しましたが私には敷居が高く感じられました。

その後、北海道医師会の女性医師等支援相談窓口のサイトで、道内での復職に向けた研修病院などが掲載されるようになり、2015年春、思いきって医師会館を訪ねました。私は、その時70歳になっていました。前の年に母を亡くし、その後の後片付け事が一段落したのもありますが、もうこれ以上延ばした

ら永久に復帰できないと思いました。突然の来訪にも関わらず、相談窓口の小林様が親切に対応くださり、コーディネーターの藤井先生にもお忙しい中お時間をお取りいただき、ご配慮いただきましたこと有難い限りでした。

母は50歳を過ぎてから車の免許を取り、80歳近くまで運転をしておりました。また、私の姉兄を幼児期に病気で亡くしたためでしょうか、私が医師になることを強く望んでいました。

まず、北海道対がん協会へ伺うことになりました。検診車に乗る医師が少ないことと、最初のトレーニングの場としては良いのではないかとこのことで、健診センター外来での研修をスタート、合間に、検査部門の様子等も見せていただいたりしました。長瀬会長をはじめ、センターの先生方、事務、スタッフの方々に本当に良くしていただきました。

ただ、私はやはり小児科医としての仕事ができるようになればとの思いがあり、産院で乳児の健診と予防接種をしている所での研修を希望したところ、受け入れていただけることとなりました。健診センターでの研修は一応秋に終了し、機会があれば検診車に乗せていただくことになりました。その後、小児科の方は伺う回数を少し増やし、期間の延長もしていただけることとなりました。

予防接種もかつてとは違い、V P D、同時接種と時代の流れを感じます。健診に関しても、何十年分の知識、学問の進歩を受けなければと思いますし、診るのは乳児ですが多岐にわたる関連分野の知識の必要性を痛感します。

今年1月から1カ月健診のお手伝いをさせていただくこととなりましたが、乳児を診ること、母親にかける言葉の重みを感じながら診療しています。また、週一回は上の先生の診療を見せていただいております、これからも良い医師になるべく、もっともっと勉強しなければと思っています。私のような者を

受け入れてくださった病院、足手まといにしかない私をご指導くださる先生方はじめスタッフの方々、ご面倒をおかけした事務の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

私がまだ研修医だった頃、お子さまがいらっしゃる女性の先生方が通勤途中でお子さまを預けられたり、ご近所の方またはご自宅でお手伝いさんやお姑さんたちに見ていただきながらお仕事をされているのを見てきました。いまだにお仕事を続けられていらっしゃる先輩方から元気な年賀状をいただくと嬉しく、ようやく私も少しは仲間入りできるかなという思いもいたします。

今は、医学を学ぶ女子も増え、仕事を続けるのは当たり前、またそのための環境も整えられてきているように思います。私のような生き方に多々ご批判はあろうかと存じます。ただ、私の拙い一文が、まだ一步を踏み出すのを躊躇していらっしゃる方の背中を押すことができたらと思っています。

これまで、私にかかわってくださったたくさんの方々に感謝しつつ。

2016年5月5日

編集者追記

小熊先生は本誌発行の2020年5月現在も勤務を継続されており、医師としてご活躍中です。

相談窓口利用者 メディアでの紹介

NHKニュース番組 「おはよう北海道」

特集: ママさん医師の復職を後押し

(2013年6月18日放送)

北海道医師会女性医師等支援相談窓口の復職研修支援事業を利用し、現場復帰を目指す女性医師の姿と、北海道医師会がこの取り組みを開始した背景などについて、NHK朝のニュース番組の特集コーナー(約5分)で報じられた。

かつて心臓・血管を専門とする内科医として第一線で活躍し、出産・子育てを機に離職していた女性医師の、9年ぶりの現場復帰となる札幌市内医療機関での研修初日をカメラが追った。長いブランクの間に以前処方していた薬の名前が変わっていることや、電子カルテのシステムが高度複雑化していることを知り、「しっかり覚えていかないと」と引き締まった表情になる瞬間や、病棟の患者さんと笑顔で接し、医師としての自信と喜びを取り戻していく様子が映し出された。

「もう一度、医師として活躍できる時が来るのだろうか…とずっと思っていたので、きょう仕事できてすごくうれしかったですね」(本人談)

この取り組みについて、藤井美穂常任理事(相談窓口コーディネーター)がインタビューを受け、「(子育てや出産を機に)女性医師という貴重な人材が失われてしまっている。何とか臨床現場に戻ってきてもらいたい。すでに経験のある人たちを現場に呼び戻す方が、より効率よく医師不足を解消できるのではないか」とコメントした。

北海道新聞

女性医師の復職着々 4人職場へ 研修で「空白」埋める

(2014年1月15日朝刊掲載)

復職研修支援事業の開始から1年半あまり。札幌と帯広で研修に参加した4人全員の復職が記事で伝えられ、このうち札幌の産婦人科医(30代)の事例が取り上げられた。

この女性医師は、長女の出産を機に札幌市内の医療機関を退職。子育てや夫の転勤などが重なり、ブランクが2年を越えたころ、女性医師等支援相談窓口の存在を知り、研修制度を利用した。4カ月間の研修を受けた協力医療機関にそのまま復職後、出産予定の第二子が双子と分かり、現在は大事をとって休職中だが「出産後はまた復職するつもり。自らの出産・育児の経験が仕事の参考になる」との本人談を載せた。

また、北海道医師会に対する取材から、研修を終えた女性医師が都市部の医療機関ほか、医師不足が深刻な地域の医療に従事することも期待する、さらに都市部の医師が増えることで、医療過疎地域への医師派遣に結び付くことも望んでいる、との談話を紹介した。

読売新聞

医療再生―挑戦者 女性医師復職の手本に 諦めずに挑戦 遅すぎることはない

(2014年10月24日朝刊掲載)

復職研修支援事業を利用して9年ぶりに医療現場への復帰を果たし、NHKのニュース番組でも取り上げられた女性医師。新聞記事はその一年後の様子を伝えた。

勤務先病院の指導医の助言をきっかけに一念発起し、仕事をしながら大学病院の放射線診断科で研修医として学ぶことや、相談窓口で紹介してもらった家事代行サービスを利用しながら仕事と家庭を両立する多忙な日常が紹介された。

「この年齢で長いブランクがあり、2人の子どもを育てながら違う診療科を掛け持ちするのは無謀と思うかもしれない。でも、諦めずに挑戦してできるようになれば、復職したい女性医師を勇気づけられると思うんです」(本人談)

カコミ欄には藤井美穂常任理事(相談窓口コーディネーター)のコメントが載り、「この女性医師は目標を持ち、両立を頑張る優秀な女性。彼女のよう人がリーダーとなり、子育て世代が働きやすい環境づくりを担ってほしい」と期待を寄せた。

2 相談窓口事業の広報活動

(1) 大学講義での 相談窓口事業の紹介

毎年、北海道医師会長が担当している医学部の講義の中で、医師会の歴史、組織の説明から、日本医学会のこと、医師会と地域医療のこと、医療の倫理、医療と医師の関連法律などとともに、女性医師支援事業についても紹介している。

講義の最後には、一生懸命勉強をして良い医者になってください。そして、頭の片隅にでも医師会のことを入れておいて、将来は医師会に加入して、是非活動にも参加してほしいとお話している。同様に、将来必要となった時に、医師会には女性医師等支援事業があることを思い出し、活用していただけるよう、講義の際には資料と併せて、相談窓口事業のチラシや広報グッズを配付している。

(2) 医会・学会での 相談窓口事業の紹介

各学会の北海道地方会、北海道内で開催される全国規模の学会等、若い女性医師が集まるさまざまな場面で広報活動を行い、一人でも多くの先生に相談窓口事業のことを知り利用していただけるよう取り組んでいる。



北海道大学医学部公衆衛生学講義で相談窓口事業を紹介
(2013年6月26日)



第65回日本産科婦人科学会学術講演会での広報活動
(2013年5月10日)



札幌医科大学医学部公衆衛生学講義で相談窓口事業を紹介
(2014年5月28日)



第119回日本眼科学会総会での広報活動
(2015年4月16日)

(3) 病院訪問事業

北海道医師会女性医師等支援相談窓口を広く知ってもらい、有効に活用していただくために、道内の臨床研修指定病院を訪問し意見交換を行った。

次 第

1. 開 会
2. 挨拶
3. 出席者紹介
4. 意見交換
5. 事業内容説明
 - (1) 北海道医師会について
 - (2) 北海道医師会女性医師等支援相談窓口について
6. その他(2014年度より追加)
 - (1) 日本医師会作成「勤務医の労務管理に関する分析・改善ツール～勤務医の健康支援をめざして～」について
 - (2) 仕事と家庭の両立支援の助成金について
7. 閉 会

■ 訪問先一覧

訪問日	訪問先	出席者
2012.08.17	砂川市立病院	長瀬会長、 藤井常任理事、 安藤コーディネーター、 小熊院長ほか11名
		
2012.08.29	医療法人溪仁会 手稲溪仁会病院	長瀬会長、畑副会長、 星井・澤田 コーディネーター、 田中院長ほか11名

訪問日	訪問先	出席者
2012.09.12	医療法人王子 総合病院	長瀬会長、 藤井常任理事、 星井コーディネーター、 大岩院長ほか12名
2012.10.29	社会医療法人北斗 北斗病院	藤井常任理事、 足立コーディネーター、 井出院長ほか4名
2013.07.18	市立稚内病院	長瀬会長、 藤井常任理事、 川村副院長ほか6名
2013.08.15	留萌市立病院	長瀬会長、 小熊副会長、 藤井常任理事、 安藤コーディネーター、 笹川院長ほか11名



2013.08.29	北見赤十字病院	長瀬会長、 小熊副会長、 後藤常任理事、 足立コーディネーター、 吉田院長ほか13名
2013.09.04	市立旭川病院	長瀬会長、 小熊副会長、 伊藤常任理事、 安藤・坂田 コーディネーター、 青木院長ほか17名
2013.09.11	KKR札幌 医療センター 斗南病院	長瀬会長、 深澤副会長、 藤井常任理事、 奥芝副院長ほか12名
2013.10.31	JA北海道 厚生連 帯広厚生病院	深澤副会長、 伊藤常任理事、 足立コーディネーター、 菊池院長ほか11名
2013.11.21	北海道 社会保険病院	長瀬会長、 深澤副会長、 伊藤常任理事、 岸院長ほか12名

訪問日	訪問先	出席者
2014.02.13	岩見沢市立総合病院	長瀬会長、藤井・伊藤両常任理事、宮本参与、中島院長ほか8名
2014.02.27	独立行政法人国立病院機構北海道医療センター	長瀬会長、小熊副会長、藤井常任理事、新谷コーディネーター、菊地院長ほか10名
2014.06.12	JA北海道厚生連俱知安厚生病院	長瀬会長、小熊副会長、澤田コーディネーター、高木副院長ほか8名
 <p>JA北海道厚生連俱知安厚生病院訪問</p>		
2014.06.20	八雲総合病院	長瀬会長、小葉松コーディネーター、佐藤院長ほか8名
2014.08.04	社会福祉法人北海道社会事業協会富良野病院	長瀬会長、小熊副会長、安藤・坂田コーディネーター、羽根田院長ほか7名
2014.08.29	江別市立病院	深澤副会長、藤井常任理事、星井コーディネーター、梶井院長ほか5名
2015.01.28	市立釧路総合病院	長瀬会長、小熊副会長、伊藤常任理事、足立コーディネーター、高平院長ほか7名
2015.03.02	函館五稜郭病院	小熊副会長、藤井常任理事、小葉松コーディネーター、老松院長ほか16名

訪問日	訪問先	出席者
2015.07.09	釧路赤十字病院	長瀬会長、深澤副会長、藤井常任理事、足立コーディネーター、二瓶院長ほか8名
 <p>釧路赤十字病院訪問</p>		
2015.07.17	社会医療法人母恋日鋼記念病院	長瀬会長、深澤副会長、伊藤常任理事、濱松コーディネーター、柳谷院長ほか19名
2015.07.22	社会医療法人孝仁会釧路孝仁会記念病院	長瀬会長、伊藤常任理事、足立コーディネーター、齋藤理事長ほか5名
2015.09.01	社会医療法人製鉄記念室蘭病院	長瀬会長、深澤副会長、濱松コーディネーター、松木理事長ほか10名
 <p>社会医療法人製鉄記念室蘭病院訪問</p>		
2015.11.04	社会福祉法人北海道社会事業協会小樽病院	長瀬会長、小熊副会長、澤田・藤根コーディネーター、柿木院長ほか9名
2015.12.11	社会福祉法人函館厚生院函館中央病院	長瀬会長、藤井常任理事、小葉松コーディネーター、橋本院長ほか10名

本事業はある一定の成果を得たが、今後も訪問事業として継続することとし、以降は方法等を検討していくこととなった。

3

相談窓口における 相談実績

相談内容に応じたアドバイスを行っている。主な相談は、育児サポートに関する事、キャリア継続に関する事、復職に関する事、女性医師支援に関する事等である。

■相談件数

年度	件数	年度	件数
2011	3	2015	130
2012	31	2016	138
2013	71	2017	175
2014	85	2018	111

4 育児サポート事業

育児中の働く親にとって、病児保育や時間外保育を担ってくれる場所がないことが大きな問題である。医師はさらに、診療の予定外の延長、患者の急変などの緊急呼び出しも多数あり、このような負担を抱える医師のために、信頼のおける育児支援事業者と連携し、相談窓口が保護者に代わって送迎・病児や病児以外の緊急預かりを手配する事業である。

■事前登録者数

年度	件数	年度	件数
2011	1	2015	18
2012	9	2016	20
2013	14	2017	12
2014	18	2018	9

■利用実績数

年度	件	病児 支援 (時間)	件	元気 支援 (時間)	件	宿泊 支援 (日)
2011	2	9				
2012	18	112	1	2		
2013	15	95	1	45	1	9
2014	36	247	7	27		
2015	38	231	44	198		
2016	60	362.5	54	136.5		
2017	76	551	60	148	2	2
2018	88	484.5	59	146		

5 女性医師等復職研修事業

復職を目指し研修を希望する女性医師等に対して、より身近な地域の医療機関において指導医のもとで復職研修が受けられるよう、復職研修受け入れ医療機関に委託し復職研修を実施し、潜在化した女性医師等に復職研修を受ける機会を与えることによって職場復帰を促し、もって地域の医師不足対策に資することを目的として2012年6月1日から実施している。

■受講状況

年度	件数	年度	件数
2012	1	2016	4
2013	4	2017	4
2014	3	2018	2

6 無料職業紹介事業所

復職を希望する相談窓口利用者に対し、医療機関の求人情報の提供と復職研修終了後の再就職先の紹介に加えて、雇用関係の成立までを支援するため、厚生労働大臣から無料職業紹介事業所の開設許可を得ることとした。

事業許可申請書、事業計画書などの申請書類を2014年7月11日付けで北海道労働局に提出し、北海道労働局の調査・確認後に、厚生労働省の労働政策審議会で諮問され、2014年9月1日付けで許可を受け事業を開始した。

■登録状況

年度	医師求人医療 機関登録数	求職 登録 数	年度	医師求人医療 機関登録数	求職 登録 数
2014	23	1	2017	44	6
2015	34	6	2018	53	7
2016	44	4			

求職登録者はすべて就職先を紹介し、雇用関係を成立している。

7 医学生への取り組み

(1) 医学生との座談会

今後の効果的な北海道医師会女性医師等支援相談窓口事業推進のための参考にするを目的として、医学生との意見交換を通じて、医師として働き続けることに対する意識やそのために必要な環境整備などに関する意見を把握するため、医学生との座談会を2012年7月30日(月)に開催した。

当日は、北大、札幌医大、旭川医大と国際医学生連盟(IFMSA-Japan)の学生男女各4名と子育て中の医師夫妻が参加。医師のキャリアアップと人生設計をテーマに、医学生に将来への期待や不安などを伺った。

次 第

1. 開 会
2. 挨拶
3. 出席者紹介
4. 座談会
テーマ「医師のキャリアアップと人生設計」
5. 閉 会

引き続き、2013年7月31日(水)に第2回目を開催し、翌年からは「医学生キャリア形成支援セミナー」として開催することとした。(26ページの再掲)



医学生との座談会(2012年7月30日)

(2) 医学生キャリア形成支援セミナー

医学生との意見交換を通じて、医師として働き続けることに対する意識やそのために必要な環境整備などに関する意見を把握し、今後の効果的な北海道医師会女性医師等支援相談窓口事業推進のための参考にするを、将来の離職防止を目的に2015年7月29日(水)に開催した。

次 第

1. 開 会
2. 挨拶
3. 出席者紹介
4. 話題提供「地域と医療と観光」
北海商科大学大学院商学研究科教授
北海道大学名誉教授 大内 東 先生
5. フリートーク
テーマ「新しい地域創生を医療から」
6. 閉 会



医学生キャリア形成支援セミナー(2015年7月29日)

8 育ボス事業

(1) 育ボスセミナー

医師一人一人が生涯にわたり能力を十分発揮するためには、医療界においても働く部下・スタッフのワークライフバランスを考え、その人らしいキャリアや人生を応援し、組織の業績と結果を出しつつ自身の生活を楽しむことができる「育ボス」の存在が必要である。

北海道医療勤務環境改善支援センターとの共催により、「育てる男が、家族を変える。社会が動く。育ボスセミナー」として、病院開設者、病院長・管理者ならびに管理職・事務長（またはそれに準ずる立場の方）等を対象に必要な環境整備などへの理解を深めていただくことを目的とした講習会を2016年9月10日（土）に開催した。参加者は30名。

次 第

1. 開 会
2. 挨拶
3. 講 演
 - 1) ワークライフバランスに関する世代間ギャップを考えよう
 講師 一般社団法人北海道総合研究調査会
 理事長 五十嵐 智嘉子 氏
 - 2) 理解と協力～こんな勤務環境だったから、俺も子育てできました！～
 講師 北海道医療勤務環境改善支援センター
 医療労務管理アドバイザー・
 特定社会保険労務士
 菅田 真紀子
 - 3) 質の高い医療クラークの配置
 —医師の勤務負担を軽減する取組み—
 講師 北海道医療勤務環境改善支援センター
 事務局長 小山田 剛
4. 意見交換
5. 閉 会

開催状況

開催日	内容・主なテーマ	参加者
2016.09.10	育てる男が、家族を変える。社会が動く。育ボスセミナー/ワークライフバランスに関する世代間ギャップを考えよう—人口減少社会におけるもう一つの落とし穴—ほか	30名
2018.02.04	育てる男が、家族を変える。社会が動く。育ボスセミナー/医師事務作業補助者のフル活用の提案	133名
2018.10.14	育てる男が、家族を変える。社会が動く。育ボスセミナー「医師の働き方を考える」/地域に必要とされる病院をめざして—医療の質と経営の質ともに向上するために—	66名



育ボスセミナー（2018年2月4日）